

第2章 市川市の自然環境の評価

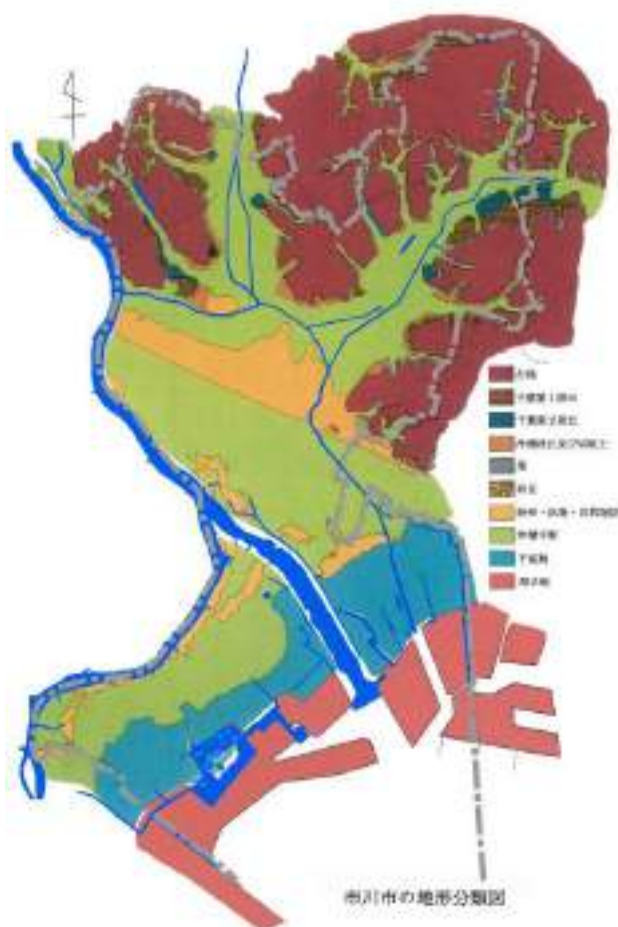
2-1 市川市の自然環境

市川市の自然環境を把握するには、まず、自然環境の成り立ちを理解することが大切です。ここでは、地形・水系・気象といった地勢的な成り立ちと、社会条件、これまでの土地利用の歴史について述べます。

(1) 地勢からみた自然環境

1) 地形

市川市の面積は、約 56.39 km²で、南北約 13.3km、東西約 8.2km の南北にやや細長い形をしています。市の北部は下総台地の西端に位置する標高 20～25mの関東ローム層からなる台地で、台地の南には沖積層からなる標高が5m以下の低地が広がり、市の中央部から南部へと平坦な地形が続いています。台地は大きく分けて西から国分台（国府台・国分の台地）、曾谷台（曾谷・大町の台地）、柏井台（柏井町・中山の台地）の3つに分けることができます。この3つの台地の間には国分谷と大柏谷の2つの幹谷が入り込んでおり、それぞれの谷の中を国分川と大柏川が流れていま





す。2つの幹谷からは台地に向かっていくつも細い谷が木の枝のように奥深く入り込んでおり、「谷津」と呼ばれる下総地方独特の細長い谷地形が形成されています。谷津の両側は急峻な斜面林にはさまれており、斜面林の裾からは湧水が出ている所も多く見られます。

市の中央部の京成電鉄の線路から国道14号（千葉街道）にかけての地域は、周辺の低地よりも2～4m程度高くなっており、少し目の粗い白っぽい砂地になっています。これは市川砂州と呼ばれる地形で、今の低地の部分が海だった頃に台地の縁が波で削られ堆積してできた地形です。この砂州の上には市川市の「市の木」であるクロマツが帯状に分布しています。

旧江戸川沿いには、江戸川が氾濫のたびに土砂を積み上げてつくった自然堤防があり、周囲より2～3mほど高くなっています。また、高谷、原木、二俣あたりにも周辺より高い微高地があり、これらの微高地は波が海岸の砂を打上げてできた浜堤と考えられています。現在、行徳の旧市街地や原木などに古いお寺が残されているのは、こうした地形的な要因が考えられます。

市の中央部から南部に広がる低地は、縄文時代の海面上昇（海進）により海中で土砂が堆積し、後の海面下降（海退）により陸化してできた平坦な地形になっています。また、現在、東京湾に面している部分は昭和30年代後半以降に大規模な海面埋立により造成された土地です。

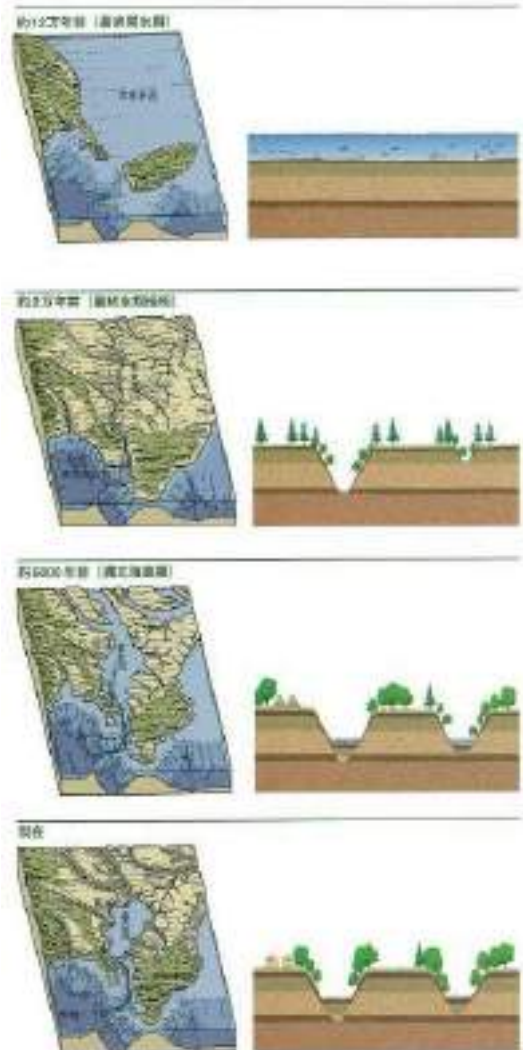
「大地の成り立ち」

今から約12～15万年前、現在の関東平野は古東京湾（ことうきょうわん）と呼ばれる海の底でしたが、海底に土砂が堆積して浅くなっていきました。その後、氷河期に入って海岸線が後退したことから、約8万年前には海底が地上に現れるようになりました。

およそ2万年前には、現在の東京湾にあたる場所はほとんどが陸地になりました。陸化とともに古東京川と呼ばれる大きな川をはじめ何本もの川が谷を刻み、現在の大柏川や国分川のある谷が形成されたと考えられています。

およそ6千年前、氷河期が終わり暖かくなって海面が上昇すると、東京湾は栃木県にまで海水が入り込んで入り江を作り、市川の半分ほどが再び海となりました。押し寄せた海水が台地を削り、残された部分が現在の台地となっています。やがて、東京湾の入り江は次第に海が後退し川が運ぶ砂によって埋められ、いまの大柏川と国分川のある谷にあたる入り江も砂や泥がたまって浅くなっていきました。

約1000年前には現在の低地にあたる部分が陸化され、現在の地形の原形がつくられました。



マルモ出版「里やま自然誌」(2004)
中村俊彦

2) 水系

江戸川は千葉県野田市で利根川より分流し、上水道や工業用水等の水源となっています。

通常は上流からの水は江戸川水門から旧江戸川へと流れ、千葉県浦安市、東京都江戸川区で東京湾に注いでいます。

行徳可動堰から下流の江戸川（通称：江戸川放水路）は大正の終わりに開削された人工河川ですが、可動堰で仕切られているため普段はほとんど海水の状態、川と呼ばれていますが、東京湾の細長い入り江のような環境になっています。

このほか、真間川、国分川、春木川、大柏川、派川大柏川等の小河川と、周辺の谷津を水源としてこれらに注ぐ多くの小規模な水路は、北より南へ流下し、江戸川、東京湾へと注いでいます。

かつて多数あった小規模な水路や小川は、いずれも普段は水量が少なく、そのほとんどが治水対策等により整理、暗渠化されて道路になっています。また護岸改修により、自然の川岸は見られなくなっています。

3) 気象

過去 10 年間（平成 5 年から平成 14 年）の年平均気温は 15.6℃、月別の平均最低気温は 1 月の 5.5℃、平均最高気温は 8 月の 26.7℃となっており、おおむね温和な気候です。

年間降水量は約 1,200mm で夏期に多く冬に少ない傾向となっており、千葉県内では海流に影響を受ける外房地方に比べて寒暖の差が大きく降水量が少ない特徴があります。



(2) 人々の生活の歴史と自然環境

1) 古代～江戸

市川市には、かなり古い時代から人々が生活をしてきた跡が見られます。台地の上にある遺跡は、その大部分が貝塚や集落跡など先土器～古墳時代のものであり、それ以外の低地や砂州上にある遺跡は、弥生時代以降のものであります。約 1000 年前からは、人々は台地周辺や砂州、浜堤などの地域に集落をつくり、主に低地で水田、台地上で畑、そして川や海で漁業を営んでいたようです。そして、この土地利用は江戸末期まで大きく変わることはなかったと考えられます。



下総西部地域の古代の集落分布図

赤点が集落を示す。谷津地形周辺に集落が集中している。*千葉県文化財センター研究紀要10(1986) 天野努 p.309* をもとに彩色などで改図

マルモ出版「里やま自然誌」(2004) 中村俊彦

◆江戸名所図会から読み解く、江戸時代の市川市の自然

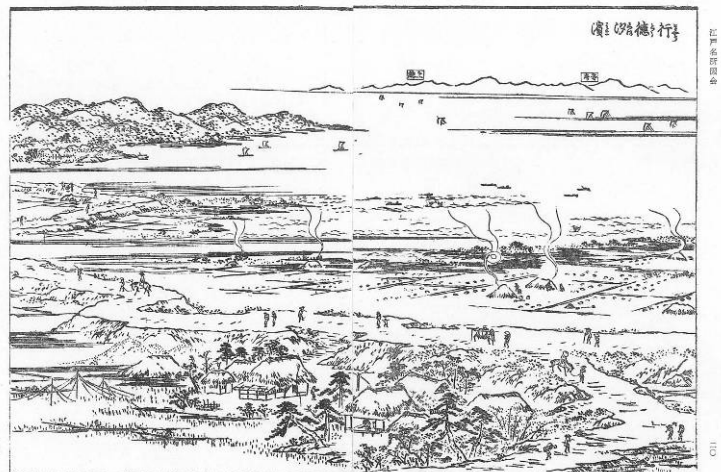
江戸時代後期の1834～1836年に、江戸近郊の名所のいわばガイドブックとして発行された「江戸名所図会」には、当時の市川市の様子が克明に描かれています。

鏡石は、弘法寺から松戸方面に伸びる道と、国分沼（現在のじゅん菜池）から伸びる平川の交わる場所にありました。

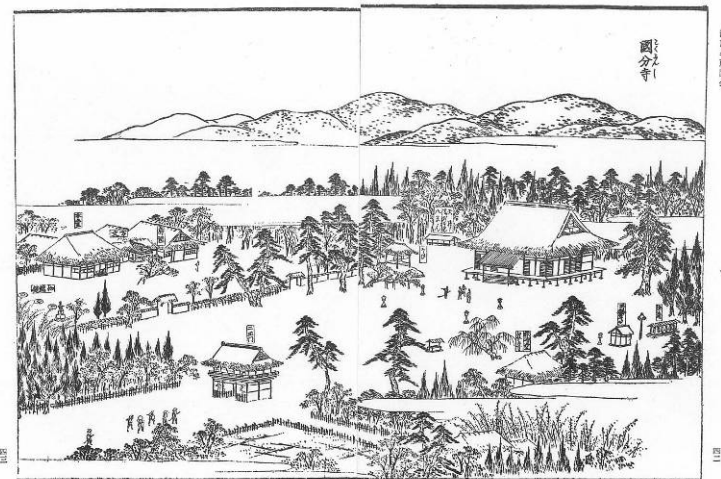
奥に向かって水田や湿地が広がり、土地の境界には黒松が植えられていた様子が分かります。

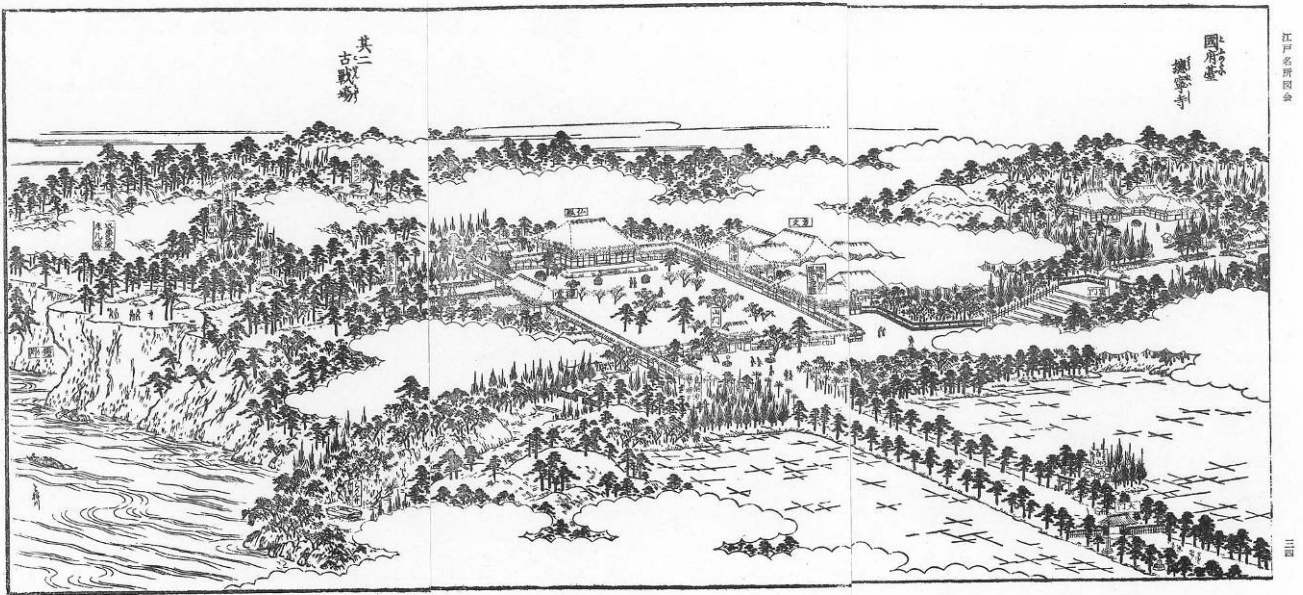


行徳塩浜の図では、行徳の海岸沿いに塩田が広がっている様子が分かります。塩田の中には小規模な塩竈があり、塩を精製しています。民家の周りには、所により竹が植えられている様子が分かります。製塩に欠かせない燃料として、北総台地で採集された松葉や薪が大量に使用されていました。



国分寺の風景。寺の周辺にはクロマツとスギが植えられていました。本堂の脇には、イチョウも見られる他、手前の民家脇には竹林も見えます。





国府台総寧寺付近。寺から続く参道には、クロマツが植えられています。また、その他の林もクロマツを主体としながら所々にスギが植栽されています。

このころは江戸川が斜面近くを流れていたようで、左端の江戸川の川岸は断崖になっており、地盤がむき出しになっています。現在形成されている里見公園の斜面林は、この図会が描かれた後、流路が変わり、斜面と河岸が離れてから形成されたものと考えられます。



出典：市川市史第6巻 史料近世下